源氏物語における希望表現について

柴田昭二
連仲友

目次

一、はじめに
二、希望表現の構成形式
三、各形式の用法
四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿[1]を受け、源氏物語を研究資料として、それにおける希望表現[2]の実態を解明しようとするものである。

源氏物語については、特に書誌的な記述は必要ないであろう。常識的なところで、平安時代中期の一〇〇七（寛弘四）年頃、藤原為時の娘紫式部と呼ばれる女性の手により作られた、長編の物語である、とする。築島裕により和文の典型として、ほぼ同時代の漢文訓読資料との比較により用語・語法の異なりのあることから、「和文特有語」「漢文訓読特有語」の位相的な区別が見られる事が知られ[3]、文中に漢語の引用や僧侶の発話などに和文ではない表現も見られるが、全体として和文で書かれた資料と言ってよいだろう。

テキストには、柳井茂他校注『源氏物語』（岩波書店　新日本古典文学大系19～23　一九九三年一月～一九九七年三月第一刷発行）を用いる。その底本は、古代学協会蔵、飛鳥井雅康等筆本五十三冊（大島雅太郎氏旧蔵。通称大島本）、それの欠く浮舟巻の底本に、東海大学付属図書館蔵明融本を用いている。本文作成に、仮名に必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は振り仮名の形で残す。漢字に必要に応じて振り仮名を（）に入れて付す。仮名遣いは底本のままとし、本文が歴史的仮名遣いに一致しない場合に（）でそれを傍記した。

二、希望表現の構成形式

源氏物語（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

「まほし」（二六四例）
「まうし」（七例）
「ばや」（七〇例）
「もがな」（二八例）
「にしかな」（一一例）
「てしかな」（二六例）
「なむ」（三二例）
「ほし」（一例）
「ねがはし」（三例）
「願」（三八例）
「ねがふ」（三四例）
「のぞむ」（一一例）
「いのる」（五八例）

右から見られるように、本書における希望表現の構成は多様に亘る。付属語として助動詞の「まほし」「まうし」、終助詞の「ばや」「もがな」「にしかな」「てしかな」「なむ」が見られ、自立語として、形容詞の「ほし」、「ねがはし」、名詞の「願」、動詞の「ねがふ」「のぞむ」「いのる」が見られる。

三、各形式の用法

1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。本書に「まほし」は二六四例見られ、量的に最も多く、希望表現の中核といえる。

(1)限りとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり（桐壺　①八頁）

(2)「たしかになむうけ給はらまほしき。」（蓬生　②一四七頁）

(3)「かの人のあたりにこそは触ればはせまほしけれ。」（若菜上　③二一四頁）

例(1)は歌における用例であり、「生きたいのは命であったことです。」の意と取れ、和歌は軽い贈答歌においても、歌語あるいは雅語を用いるのが定式であり、歌中の用例は意味のある用例となる。例(2)(3)は会話文における用例であり、「たしかにお受けしたい。」、「あの方のお側に慣れ添わせたいものです。」の意と解され、いずれも希望表現の下位分類の「願望[4]」を「表出[5]」する用法である。

(4)親王の御筋にてかの人にも通ひきこえたるにや、といとゞあはれに見まほし。（若紫　①一六二頁）

(5)経に心を入れひて読み給へるさま、絵にもかゝまほし。（手習　⑤三七四頁）

例(4)(5)は地の文において、文末に終止形で結ぶ用例である。「たいそうお逢いしたいものです。」、「お経を読む美しい様子を絵にもかきたい。」の意と解され、作者が地の文の中に自らの思いを述べた部分と読むことができる。その解釈を取れば、書き手の「願望」を「表出」する用法と見られるであろう。

(6)筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思入らむも、（東屋　⑤一二四頁）

(7)入りて見るに、ことさら人にも見せまほしきさましてぞおはする。（手習　⑤三七四頁）

例(6)(7)は地の文における「まほし」の連体修飾法の用例で、「筑波の山に分けて入って、よく見たいお気持ちはあるが、」、「(浮舟の)格別に人に見せてやりたいほどの美貌で、」の意と解され、一般的な「願望」を「説明[6]」する用法である。

(8)大将は、御ありさまゆかしうて内にもまいらまほしくおぼせど、うち捨てられて見をくらむも人わろき心ちし給へば、おぼしとまりて、（賢木　①三四九頁）

(9)石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて戴かまほしう思へど、（真木柱　③一一〇頁）

例(8)(9)は「まほし」の連用修飾法の用例である。「大将は斎宮一行の出発のご様子が見たくて、内にも参上したくお思いになるが、」、「(髭黒は)両方とも拝みたいと思うが、」の意と解され、いずれも地の文で作中人物の一般的な「願望」を「説明」する用法である。

以上のように「まほし」は、文末では「表出」の用法、修飾節では「説明」の用法で「願望」を表すのに用いられている。

(10)「かの御言あやまたず、聞こえうけたまはらまほしさになん。」（椎本　④三六二頁）

(11)この君を尋まほしげにの給しかば、かゝるついでにもの言ひふれんと思ほすによりて、（宿木　⑤一一三頁）

(12)御供に、われも〳〵と物ゆかしがりて、まう上らまほしがれど、こなたにとをきをば選りとゞめさせ給て、（若菜下　③三三四頁）

例(10)(11)(12)は「まほし」に接尾語「さ」「げ」「がる」が付いた派生語の用例である。例(10)は「隔てなくお付き合いしたいと思います。」の意で名詞を作る接尾語のついた例であり、例(11)は「浮舟に会いたそうにおっしゃっていらしたので、」の意、例(12)は「われもわれもと心引かれて、参上したがるけれど、」の意と解され、いずれも作中人物の心中を外から見た「願望」を「説明」する用法で

ある。

2、「まうし」の用法

次に、「まうし」の用法を見る。本書に「まうし」は七例見られる。「まうし」は「まほし」に対する「憂し」の類推から発想された、打消しの希望表現として作られた語であると思われる。

(13)かねつきてとぢめむことはさすがにてこたえまうきぞかつはあやなき
（末摘花　①二一七頁）

(14)この君の御童姿いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服し給ふ。
（桐壺　①二四頁）

(15)「数ならぬ身を見まうくおぼし捨てむもことはりなれど、」（葵　①三〇〇頁）

例(13)は和歌における用例である。「ご返事したくないことはやはり一方で理屈が立たないのですが、」の意、例(14)は地の文における用例であり、「この若宮の御童子姿を本当に替えたくないとお思いになるが、十二歳でご元服なさる。」の意、例(15)は会話文における用例であり、「わたしのような人数にも入らぬ者を、見たくなくてお見捨てになるというのももっともですが、」の意と解され、いずれも否定的な「願望」を「説明」する用法である。

3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。本書に「ばや」は七〇例見られる。

(16)須磨の浦に心をよせし舟人のやがて朽たせる袖をみせばや（明石　②九〇頁）

(17)おなじ枝を分きて染めける山姫にいづれか深き色ととはばや
（総角　④四〇八頁）

例(16)(17)は和歌における用例である。「須磨の浦で同情申し上げた船人（私）が、その時以来絶えぬ涙で朽ちさせてしまった袖をあなたに見せたいものだ。」、「同じ枝を片方だけを特別染め分けた山姫に、どちらが深い色か尋ねたい。」の意と解され、いずれも詠み手自身の「願望」を「表出」する用法である。

(18)「ときぐは世の常なる御けしきを見ばや。」（若紫　①一七二頁）

(19)「まろは、いかで死なばや。」（浮舟　⑤二四六頁）

例(18)(19)は会話文における用例である。「時に世間の夫婦と同じご様子を見たいものだ。」、「私は、どうしても死にたい。」の意と解され、いずれも文末において話者自身の「願望」を「表出」する用法である。

(20)君うち笑み給て、知らばやと思ほしたり。（夕顔　①一〇六頁）

(21)さはれ、このついでにも死なばや、とおぼす。（柏木　④一二頁）

例(20)(21)は地の文における用例である。「是非その女の素性を知りたいとお思いになった。」、「このついでに死にたい、とお思いになる。」の意と解され、作中人物の内心の「願望」を「表出」する用法と見られる。

4、「もがな」の用法

次に、「もがな」の用法を見る。本書に「もがな」は二八例見られる。

(22)尋ねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそこと知るべく
（桐壺　①一六頁）

(23)むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと
（明石　②七七頁）

例(22)(23)は和歌における用例である。「魂を捜してゆく幻術士がいて欲しい。」、「むつまじく言葉を交わす相手がほしい。」の意と解され、いずれも詠み手自身の「願望」を「表出」する用法である。

(24)「さらぬ別れはなくもがな」となんこまやかに語らひ給て、

（夕顔　①一〇三頁）

(25)「この宮をあづかりてはぐくまん人もがな。」（若菜上　③二一三頁）

例(24)(25)は会話文における用例である。「避けられない死別はあらずにいたい」、「この宮をあずかる後見役がいてほしい。」の意と解され、いずれも文末におかれ話者自身の「願望」を「表出」する用法である。

(26)いかでおかしからむ兒もがなと、宮ぞ時〻おぼしのたまひけるに、

（橋姫　④二九八頁）

(27)姫君たちの御有さまあたらしく、かゝる山懐にひき籠めてはやまずもがな、とおぼしつゞけらる。（椎本　④三四二頁）

例(26)(27)は地の文における用例である。「何とか可愛い児がいてほしいと、」、「こんな山ふもとに埋もれたまま終わらせたくない。」の意と解され、いずれも作中人物の内心の「願望」を「表出」する用法である。

5、「にしかな」の用法

次に、「にしかな」の用法を見る。本書に「にしかな」は一一例見られる。

(28)「空のけしきにつけても、心のゆくこともし侍りにしかな。」

（薄雲　②二四二頁）

(29)「ともかくもおぼし分くらむさまなどを、さはやかにうけたまはりにしかな」と、（総角　④三八五頁）

例(28)(29)は会話文における用例である。「その風情を心ゆくまでしたいものだ。」、「そちらの真意をはっきり承りたい。」の意と解され、話者自身の「願望」を「表出」する用法である。

(30)さらむ世を見はてぬさきに、心と背きにしかな、とたゆみなくおぼしわたれど、（若菜下　③三一八頁）

(31)われも人も見おとさず、心違はでやみにしかな、と思ふ心づかひ深くし給へり。（総角　④四三〇頁）

例(30)(31)は地の文における用例である。「夫婦の仲の行く先を見届ける前に、自分から世を捨てたいものだ。」、「精神的な共感を保っていたい、」の意と解され、作中人物の内心の「願望」を「表出」する用法である。

6、「てしかな」の用法

次に、「てしかな」の用法を見る。本書に「てしかな」が二六例見られる。

(32)おしからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとゞめてしかな

（須磨　②二二頁）

例(32)は和歌における用例である。「どうなっても構わない私の命と引き換えに、今のこの別れをしばらくの間でも引き留めたいものだ。」の意と解され、詠み手自身の「願望」を「表出」する用法である。

(33)「いたうもてなしてしかな。猶うちあはぬ人の気色見集めむ」との給へば、

（玉鬘　②三六五頁）

(34)「れひのおどろおどろしき聖言葉、見はててしかな」とて笑ひ給ふ。

（橋姫　④三二六頁）

例(33)(34)は会話文における用例である。「大事に世話してみたいものだ。」、「例によって大げさな聖人ぶった物言い、それがしまいにどうなるか見届けたい。」の意と解され、話者自身の「願望」を「表出」する用法である。

(35)あやしう心得ぬ事もあるにや、見てしがな、と思ほせど、

（末摘花　①二二二頁）

(36)かのありし猫をだに得てしかな、思事語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつけむ、と思ふに、（若菜下　③三一一頁）

例(35)(36)は地の文における用例である。「妙に納得できないこともあるのか、見届けたいものだ。」、「せめてあの猫をだけでも手に入れたいものだ。」の意と解され、作中人物の「願望」を「表出」する用法である。

7、「なむ」の用法

次に、「なむ」の用法を見る。本書に「なむ」は三二例見られる。「まほし」「まうし」「ばや」「もがな」「にしかな」「てしかな」が話者自身に向けられる「願望」を表すのと異なり、「なむ」は話者が他者に向けられる「希求」[7]を表す語である。

(37)山がつのいほりに焚けるしば〳〵もこと問ひ来なん恋ふるさと人

(須磨　②三八頁)

(38)ほと、ぎす君につてなんふるさとの花たち花はいまぞ盛りと

(幻　④二〇一頁)

例(37)(38)は和歌における用例である。「しばしば私に便りを寄こしてほしい。」、「ほととぎすよ、亡き君(紫上)に言伝えてほしい。」の意と解され、詠み手自身の「希求」を「表出」する用法である。

(39)「いとかうものをそろしからぬ御住まひに、おぼし移ろはなむ。」

(蓬生　②一三四頁)

(40)「おなじうは、この御簾のもとにゆるされあらなむ。阿闍梨の下る、ほどまで」などつれなくの給。(夕霧　④九六頁)

例(39)(40)は会話文における用例である。「まったくこのように恐ろしい思いをしないですむお邸に移ってほしい。」、「こちらの御簾近くで許してほしい。」の意と解され、話者自身から相手への「希求」を「表出」する用法である。

(41)人〻ありしま、に聞こえ漏らさなむ、うしとおぼすともいかゞはせむとおぼす。(夕霧　④一〇二頁)

(42)身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなん、とぞ思はべる。

(若菜上　③二八三頁)

例(41)(42)は地の文における用例である。「事実通りに報告してほしい。」、「私よりはるかにご長命であってほしいと思っております。」の意と解され、相手への「希求」を「表出」する用法である。

8、「ほし」の用法

次に、「ほし」の用法を見る。本書では単独の「ほし」の「用例はないが、派生語の「欲しげなり」が一例見られる。

(43)おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。(野分　③三六頁)

例(43)は地の文における用例である。「大空を覆って風を防ぐことのできるような大きな袖が欲しいようだ。」の意と解され、外から見た作中人物の「願望」を「説明」する用法である。

9、「ねがはし」の用法

次に、「ねがはし」の用法を見る。本書に「ねがはし」は三例見られる。

(44)願はしきさまにもなりなましとおぼすには、まづ対の姫君のさうゞしくてものし給らむありさまぞ、ふとおぼしやらる、。(葵　①二一四頁)

(45)いかめしき御よそひを待ちうけたてまつり給はむこと、願はしくもおぼすまじく見たてまつり侍しを、ことどもをばそがせ給て、

(若菜下　③四〇二頁)

例(44)(45)は地の文における用例である。「念願する出家姿にもなってしまおう、」、「荘厳な御儀をお待ち受けなさるようなことは、お望みでもないように見受け申しましたので、」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

10、「願」の用法

次に、音読されたと思われる「願」の用法を見る。本書に「願」は三八例見られる。

(46)言ふかぎりなき願ども立てさせ給けにや、たいらかに事なりはてぬれば、
（葵　①三〇七頁）

(47)御書の師にてむつましくおぼす文章博士召して、願文作らせ給ふ。
（夕顔　①一四三頁）

(48)「初瀬のくわんをん、けふことなくて暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。
（浮舟　⑤二〇七頁）

例(46)(47)(48)における「願」「願文」「大願」はいずれも仏教用語であり、名詞用法である。

11、「ねがふ」の用法

次に、「ねがふ」の用法を見る。本書に「ねがふ」は三四例見られ、そのうち動詞用法は一四例、名詞用法は二〇例見られる。

(49)をはすらん所に尋ね行かむと願ひ給ひししるしにや、つゐにうせ給ひぬれば、またこれを悲しびおぼす事限りなし。（桐壺　①一九頁）

(50)なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり。（東屋　⑤一三〇頁）

例(49)(50)は「故更衣の今おいでになる所に尋ねて行こうと願われた結果であろうか、」、「生活に困らず平穏無事に過ごせることを願うのだ。」の意と解され、いずれも動詞用法である。

(51)入道も極楽の願ひをば忘て、たゞこの御けしきを待つことにはす。
（明石　②七八頁）

(52)「たゞしばし願ひのところを隔たれるを思ふなんいとくやしき、」
（総角　④四五三頁）

例(51)(52)は「入道も極楽往生の願いを忘れて、源氏の御出を待つことにした。」、「今しばらくは本願の浄土から隔っているのを思うと、まことに悔しい。」の意と解され、いずれも仏教的な希望を表す動詞連用形の名詞用法である。

12、「のぞむ」の用法

次に、「のぞむ」の用法を見る。本書に「のぞむ」は一一例見られ、そのうち動詞用法は九例、名詞用法は二例見られ、動詞用法が主である。

(53)かの内の大殿の御むすめの、尚侍望みし君も、さる物の癖なれば、
（真木柱　③一四五頁）

(54)御後見望み給人々は、あまたものし給めり。（若菜上　③二一七頁）

(55)かの家司望み給し大納言も、やすからず思ながらさぶらひ給。
（若菜上　③二三九頁）

例(53)(54)(55)における「のぞむ」はいずれも「尚侍」「後見」「家司」など官職を志願する場面に表現される動詞用法である。

(56)はかゞしき方の望みはさるものにて、年のうち行きかはる時〳〵の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともし侍りにしかな。」
（薄雲　②二四二頁）

(57)遙かに西の方、十万億の国隔てたる九品の上のぞみ疑ひなくなり侍りぬれば、（若菜上　③二七七頁）

例(56)は「頼もしい世間的な望みはともかく、」の意と解され、動詞用法と同様に世俗的な意味を表すが、(57)は「九品蓮台に上る望み」の意と解され、「のぞみ」の仏教的な希望に表れる唯一のものである。二例いずれも動詞連用形の名詞用法である。

13、「いのる」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。本書に「いのる」は五八例見られ、そのうち動詞用法は一八例、名詞用法は四〇例見られ、名詞用法が主である。

(58)年を経て祈る心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む（玉鬘　②三四〇頁）

(59)「たゆみなく祈り申侍る験にこそ侍れ」と言ふ。（玉鬘　②三五一頁）

例(58)(59)は「長年姫君の幸運を祈っている心が叶わなかったら、」、「怠りなく祈り申しております効験でございます。」の意と解され、いずれも仏教的な希望を表す動詞用法である。

(60)少納言なども人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。（賢木　①　三五六頁）

(61)最勝王経、金剛般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。（若菜上　③二六一頁）

例(60)(61)は「尼上のお祈りの効験ゆえとお考え申し上げた。」、「大変盛大なご祈祷である。」の意と解され、「祈り」はいずれも「祈祷」という仏教的な希望を表す名詞用法である。

四、おわりに

以上、源氏物語における希望表現の構成と用法を考察してきた。その希望表現の構成形式については、付属語形式としては助動詞「まほし」「まうし」、終助詞「ばや」「もがな」「にしかな」「てしかな」「なむ」があり、伝統的な和文の用法を伝えているといえよう。自立語形式には形容詞「ほし」、「ねがはし」、名詞「願」、動詞「ねがふ」「のぞむ」「いのる」が見られる。

各構成形式の用法については、「まほし」は用例数が最も多く、希望表現の中の「願望」を表し、「表出」する用法と「説明」する用法とが見られる。「まうし」は「まほし」の否定表現として用いられ、用例数は少ない。終助詞の「ばや」「もがな」「にしかな」「てしかな」は「願望」を表し、「なむ」は「希求」を表す。和歌においては詠み手の希望、会話文においては話者の希望、地の文においては作中人物の内心の希望を表す。助動詞「まほし」は「願望」の「表出」と「説明」と両方の用法が見られるが、「ばや」などの終助詞はいずれも「表出」の用法のみが認められる。また、付属語形式はいずれも仏教的・宗教的な希望を表すものではなく、俗的・一般的な希望を表すものである。

形容詞「ほし」「ねがはし」は「願望」を「表出」する用法である。名詞「願」はすべて仏教用語の用法であり、「ねがふ」「のぞむ」「いのる」は動詞用法と連用形名詞用法が見られる。そのうち、「ねがふ」は広く思い願う場合に用いられ、「のぞむ」は特に官職を志願する場合、「いのる」は神仏に祈祷する場合に用いられている。

要するに、源氏物語においては、和文系付属語形式が希望表現の中核であり、自立語形式は周辺的存在である。希望表現において、本書は特別の表現を用いることなく、和文の伝統的な位置にあるものと言えよう。

【附記】

本書には、次のような「～たし」の例も見られる。

(62)されば、かのさがな物も、思ひ出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見んにはわづらはしく、よくせずはあきたき事もありなんや。（帚木　①五六頁）

(63)にくしとはなけれど、御心とまるべきゆへもなき心ちして、なをかのうれたき人の心をいみじくおぼす。（空蟬　①九一頁）

(64)いまより後の栄へは、猶命うしろめたし、静かにこもりゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん、と思ほして、（絵合　②一八五頁）

このような「～たし」は希望の助動詞「たし」と同形であるが、意味上「厭らしくなる事」、「あの恨めしい気持」、「短命に終わるのではないかと心配だ」、と解されるのが自然であろう。希望とは異なる語構成からなる語であり、本稿においてはこれらの「～たし」を形容詞「あきたし」「うれたし」「うしろめたし」の一部と見なし、希望表現として扱わないことにした。したがって、本書に希望表記の「たし」は認められない。

【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第Ⅰ部第１０９号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「～たい」の形で、「希求」は「～てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称～たい」「一人称～てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称～たかった」「一人称～てほしかった」、二人称形式「二人称～たいか」「二人称～てほしいか」、三人称形式「三人称～たがる」「三人称～てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会　昭和三八年三月
築島裕『平安時代語新論』東京大学出版会　昭和四四年六月

(4) 注(2)参照。

(5) 注(2)参照。

(6) 注(2)参照。

(7) 注(2)参照。

（しばたしょうじ　　香川大学名誉教授）
（れんちゅうゆう　　広島市立大学客員研究員）

（二〇二一年五月三一日受理）